

007 と刑事コロンボ ——現代ミステリにみる英米文化——

氏家 理恵

はじめに

007と刑事コロンボはどちらも映画とTVドラマとして長期シリーズ化している作品であり、その主人公たちの名である。日本でもなじみのあるこの二つは、もともとはイギリスの小説とアメリカの戯曲が原作であり、それが人気を呼んでそれぞれ映画化、テレビドラマ化された。

007を生み出したのはイギリスのイアン・フレミング (Ian Fleming, 1908-1964) で、第1作の『カジノ・ロワイヤル』(Casino Royale, 1953) 以降、毎年のように新作を出し、短編集を含めて17作品を著した。1962年にショーン・コネリー主演で映画化されるとその人気は不動のものとなり、フレミングの死後もシリーズは作家を何回か代えながら受け継がれ、現在も新作が作られている。

刑事コロンボはリチャード・レビンソンとウィリアム・リンク (Richard Levison & William Link) が共同で書いた『殺人処方箋』(Prescription: Murder, 1968) という舞台劇の戯曲が書き直され、テレビドラマ化されたものである。その後1978年までの10年間に渡り43話とテレビ映画2本の計45作品が作られ、また、そのほとんどがノベライズされている。1987年にレビンソンが亡くなったことでこの名コンビは解消したが、その後もコロンボ役のピーター・フォークがプロデューサーとなって1988年から新シリーズを再び制作し始め、作品はレビンソンとリンクの作風を踏襲する形で2003年まで作り続けられた。

007と刑事コロンボは両者とも原作者の死によりその手を離れながらも、次々と新作が生み出されシリーズ化された作品なのである。そして、物語の主人公である007とコロンボを始めとする登場人物たちはステレオタイプ化し、彼らを取り巻く人間関係や物語の展開はパターン化されている。物語が同じパターンを持つということは下手をする

と飽きられてしまう危険性もあるが、007やコロンボの場合は、人気が続いている。それはつまり、それだけ読者や視聴者の興味関心を惹きつける要素が作品にあるということである。

本稿では主人公の007や刑事コロンボ、そして物語のパターンから作品の魅力を探っていくが、それと同時に、それぞれの物語の根底にはイギリス的・アメリカ的な社会構造が関わっていることも指摘したい。そして、007とコロンボという主人公とその物語がなぜイギリスで、またアメリカで受け入れられたのかという理由が、娯楽作品としての完成度以外のところにも潜在的にあったことを明らかにする。

I. ミステリ概観

現在、ミステリの定義はとても幅広いものになり、探偵が出てこない作品や推理さえ行われない作品も存在する。ここでは「ミステリ」を広義で使うことにするが、まずは簡単にミステリの歴史・種類・要素について概観しておこう。

ミステリというジャンルにおける基本形、つまり推理小説・探偵小説が確立したのは19世紀初頭と言われている。警察制度の発達のなかで犯罪捜査をする部署がパリやローマなどの大都市を中心に成長してきた時期であった。現在のロンドン警視庁、スコットランドヤード (Scotland Yard) の原型ができたのもこの頃である。つまり、警察機構のなかで犯罪捜査を専門に行う刑事が生まれたのである。集団捜査ももちろんあるが、少数の刑事が個々に犯罪捜査をするという捜査方法が生まれ、犯罪捜査技術が進歩した。この社会構造の変化と刑事という職業の誕生がなければ、それを下敷きにした物語も生まれなかった。もちろん、後から考えればミステリ的な要素のある作品は19世紀以前にも存在しているのだが、ジャンルとして

の「ミステリ」が誕生したのはこの時期ということになる。

そして、名探偵が登場して困難な謎を解き明かすという、いわゆる「本格ミステリ」と呼ばれるミステリの原型を作ったのが、19世紀半ばのアメリカの作家エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe, 1809-49）であった。彼は「モルグ街の殺人」（“The Murders in the Rue Morgue,” 1841）でオーギュスト・デュパン（C. Auguste Dupin）という探偵を生み出し、その物語パターンと探偵像は、19世紀末イギリスのコナン・ドイル、20世紀になってアガサ・クリスティに代表されるミステリの下地となった。ドイルが生み出したシャーロック・ホームズ、クリスティが生み出したエルキュール・ポアロらいわゆる「名探偵」は、みな頭脳明晰で推理能力にすぐれ、証拠や証言をもとに論理を働かせ、警察も匙を投げるような難事件をいとも簡単に解き明かす。物語のパターンとしては、まず犯罪が起こり、その捜査の途中で主に警察による間違った捜査がなされたあげく、最後に名探偵が登場して種明かしをするというものであった。1920年代から1930年代にかけては本格ミステリの黄金期と呼ばれる時代を迎え、クリスティの他、エラリー・クイーンやディクスン・カーなどによって次々と名探偵が生み出された。

このような名探偵の伝統は現在でも受け継がれているが、ミステリの種類はミステリ作家たちの実験的文学的試みと社会の歴史的变化とにより、少しずつ枝分かれしながら発展した。その結果、たとえばハード・ボイルド、スパイ・ミステリ、警察小説、法廷ミステリ、サイコ・ミステリなどのようにジャンルが細分化されていった。

現在に至るミステリの変容のなかで最も顕著なのが「謎」の変化である。初期のミステリにあっては罪を犯した犯人が最大の謎で、犯人捜査が探偵の最大の目的であった。かつての推理小説が「フーダニット」（whodunit=Who have done it?）と呼ばれたのはそのためである。しかしながら、ミステリの歴史が進むにつれてその「謎」は、どのように殺害したのか、どのように盗んだのかなどの犯罪方法になったり、容疑者のアリバイトリックや犯罪トリックになったりと多様化していった。

その後、「なぜその犯罪を行ったのか」という動機、つまり犯罪に至る人間の内面的な感情が探偵の探るべき「謎」として提示されるようになり、現在では、たとえばアメリカの作家パット・マガーの作品のように、「被害者」や「探偵」そのものが探すべき「謎」であるというものも出てきた。なかには「犯罪」が起こったのかどうかも不確定な作品さえ存在する。

今や「ミステリ」と一口に言ってもさまざまなパターンの作品を目にする状況にあり、「ミステリ」という文学ジャンルそのものも非常に広い意味でとらえなければならなくなっているのである。その結果、物語に何らかの「謎」があり、その「謎」を調べ解き明かす探偵役（それは刑事や名探偵とは限らない）が登場するというのが「ミステリ」の最低限の要素となるに至った。このような非常におおまかな定義は、それだけ「ミステリ」が多様化しているということを示している。

II. ミステリとしての『007』と『刑事コロンボ』

それでは、このような多様化したミステリの状況のなかで、007と刑事コロンボの位置づけはどのようなものになるのであろうか。まず『007』シリーズだが、007というコードネームを持つイギリス人スパイが活躍する点においては明らかにスパイ・ミステリである。あるいは、スパイとして活躍するなかでアクションを伴う冒険をするということでは冒険ミステリにも属するかもしれない。1950年代はスパイ・ミステリの黄金期であるが、第1作『カジノ・ロワイヤル』はまさにその時期に誕生したのである。

そもそもスパイ小説が書かれるようになったのは1910年代のことだが、このジャンルの確立にも社会変動が大きく影響している。この時期、力を蓄えたヨーロッパ各国による植民地戦争が熾烈を極め、アジアやアフリカを主とする植民地で、そしてそれぞれの国の国境地帯での小競り合いが顕著になってきた。また、敵国よりも優位に立つために情報を得ることの重要性が増し、いわゆる諜報活動、スパイ活動が必須のものとなった。諜報機関が暗躍する時代が本格的に始まったのである。

1914年から1918年の第一次世界大戦、さらに1940年代の第二次世界大戦を経て世界規模の戦争は終結したものの、アメリカと旧ソ連という二大強国の微妙な均衡状態が訪れた。世界が西側（資本主義）と東側（共産主義）とに分裂して、お互いを牽制しあいながら歩んでいた時期である。双方のバランスを取るには相手国の情報、特に軍事情報を把握しておかなければならないという必要性から、それぞれの側の諜報活動がますます盛んになった。諜報活動に「暗躍」するスパイという設定とその世界はミステリ作家にとっては大きな魅力となり、それを題材や物語背景とした作品が次々と生まれることになったのである。

アメリカの諜報機関はCIA、ソ連の諜報機関はKGBであったが、イギリスにはMI6（正しくはSIS）という英国情報部があり、CIAと微妙な関係を保ちながら西側世界を支えてきた。007の生みの親であるフレミング自身、ロイター通信やイギリス軍情報部で働いた経験を持ち、『007』シリーズは彼のジャーナリズムの世界や軍での経験を存分に盛り込んでいると思われる点で非常に興味深い。実際にはフレミングは作品でMI6という言葉は使っていないのだが、007が国防省付属の海外情報部に所属しているという設定から、当然MI6のメンバーであろうと推測されるわけである。

しかしながら、007はスパイ・ミステリとして重大な欠点を持っている。それは何か。非常に単純だが、主人公の本名がジェイムズ・ボンドであることが007という暗号名と同じくらい知られているということである。スパイにとって本名を知られていることほど危険なことはないのだが、彼はスパイでありながら、あまりにも堂々と敵地に乗り込み、派手に暴れる。彼の名前は闇の世界では有名であり、誰でも彼が007だと分かる。スパイ・ミステリとして、これほどリアリティのない作品はない。

一方、『コロンボ』シリーズは、日本語タイトルにはすべて『「刑事」コロンボ』とあるように、刑事が主人公である。警察官が主人公という点では警察小説にも思えるが、実際には組織捜査的な要素はほとんどなく、コロンボ1人が事件解決へ向かって捜査を進めていくという意味で、本格ミス

テリの要素が高い。

ここで、作品を読み解く重要な手がかりとして、『コロンボ』シリーズにおける「謎」を考えてみたい。コロンボ作品では、犯人が登場して被害者を殺害するところから物語が始まる。観客あるいは視聴者には最初から、犯人も、殺害方法も、犯行動機も、そして犯人のトリックさえ提示され、逆にそれらを知らないのは主人公のコロンボだけである。「謎」があるのがミステリだとしたら、そして、その「謎」を解くのがミステリの結末だとしたら、コロンボにおける「謎」は何なのであろうか。答えは、「どのようにしてコロンボが真犯人を突き止め、犯人のトリックを見破り、そしてどのように犯人を逮捕へと追いつめるか」である。「謎」は犯人や犯行に関することでは全くなく、主人公コロンボの行動の行方であり、その「謎」を解く「探偵役」は作品を観ている私たちなのだ。刑事が難解な事件を解決するという、一見、本格ミステリと思われる『コロンボ』シリーズは、実はミステリとしては非常に風変わりな位置にある。

Ⅲ. 007とコロンボ

Ⅱで見てきたように、極言すれば007とコロンボは、ミステリとしてもミステリの探偵役としても完成されていない。では、それでも愛される007やコロンボの魅力や面白さはどこにあるのか。主人公二人について原作における描写を中心にプロフィールをあらためてまとめてみると、対照的な人物像が浮かび上がってくる。

まず、007のプロフィールは以下の通りである。

本名：ジェイムズ・ボンド

身長：183cm 体重：76kg

眼の色：青 髪の色：黒

両親：父親はスコットランド人

母親はスイス人

教育：パブリックスクール出身

（イートン校、フェティックス校）

オックスフォード大学

語学：英語、フランス語・ドイツ語他

職業：職種は国防省第一級国家公務員

身分は国防省勤務の海軍予備役中佐

特技：ボクシング・柔道・射撃、ナイフ投げ
フェティックス校ボクシングチャンピオン、学校代表
パブリックスクール初の柔道部を創立
車：バントレー製クーペやスウェーデン製のサーブなど（数回乗り換えている）
情報部から支給されたBMW特別仕様車
拳銃：25口径ベレッタを常時携帯
その他：過度の喫煙、悪癖は飲酒と女性

007の外見描写からは、彼がステレオタイプとしてのヨーロッパ的な美を備えていることが暗示されている。彼は文武両道の知的エリートであり、また、国家公務員という職業のエリートでもある。女性には優しく、正義を貫くという典型的なイギリス紳士であり、ヨーロッパの精神風土の一つである騎士道的精神を現代でも体現している人物と言えよう。

一方、コロンボはどうであろうか。

本名：？・コロンボ
体格：中肉中背
家族：祖父、両親ともイタリア人
5人の兄弟と1人の姉（妹）がいる
出身：ニューヨーク生まれニューヨーク育ち
教育：高卒
職業：卒業後、軍隊に入り朝鮮戦争に参加。その後ニューヨーク市警察に入り、アイルランド人の上司の元で警官としての訓練を受ける。1958年にロサンゼルス市警察に転勤
愛車：フランス製プジョー
拳銃：拳銃は持たない
その他：乗り物酔いする、アレルギーがある、泳げない、睡眠は8時間必要、チリとブラック・コーヒーが好物、「うちのかみさんがね」と「もう一つ質問よろしいですか」が口癖

コロンボがイタリア系移民の血筋であることは、その名前からも分かるだろう。そして、大家族・ニューヨークのチャイナタウンのそばで育った環

境・教育環境・職歴など、どれをとっても、007とは大きく異なっている。

コロンボの肩書き「刑事」の原語は'lieutenant'であるが、アメリカの警察機構のなかでのこの肩書きは、日本で言えば「警部補」に当たる、いわゆる中間管理職のような微妙な立場である。¹⁾彼は高卒でたたき上げの警官であり、その能力から「警部補」にはなっただけでも「警部」にはなかなか届かない、もしかしたら定年間近まで「警部」にはなれないかもしれない、というニュアンスがこの肩書きにはある。日本でも警察機構における「キャリア」と「ノンキャリア」という言い方が定着したが、コロンボはノンキャリア警官の代表であり、彼の肩書きはその象徴なのである。

さらにここで一つ確認しておきたいのは、アメリカ社会におけるイタリア系移民の位置付けである。イタリア系移民の社会的地位と社会的イメージを知ることが、実はコロンボの立場を知るのに重要なポイントとなる。アメリカはさまざまな人種・民族そして言語・文化で構成された国であるが、しかし、アメリカの歴史においてその人種や民族の立場は必ずしも平等・公平というわけではなかった。それが人種差別という形で吹き出し、差別されるのはネイティブ・アメリカンや黒人を始めとするマイノリティの民族、差別するのは白人といった大きな構図ができあがった。

同じ構図は白色人種のなかでも存在し、微妙な力関係が生じた。アメリカにおけるマジョリティは、数が多い民族ということ必ずしも指してはおらず、権力を持っている＝社会の上部にいて社会を動かしている人種民族ということになるが、その代表はワズプ（WASP）という短縮語で知られる白色人種アングロサクソン系プロテスタントである。これからすると、白色人種ではあるがアングロサクソン民族ではなくラテン民族のイタリア人は、カトリックということもあって白人のマジョリティからは外れる存在である。

また、アメリカに移民してきた理由もその構造形成に関係している。もともと財産があつてアメリカに移り住んだ人々と、飢えや貧困から逃れ新天地アメリカで一旗揚げようとほとんど着のみ着のままやってき人々とは、アメリカでの出発

点が違う。アイルランド人とイタリア人は後者であることが多かった。もちろん彼らすべてがそうであったわけではなかったのだが、貧しい移民が多かったということが民族全体に対する固定化されたイメージを生み、それが偏見や差別意識へと変容していった。

そのような、貧しさと飢えという理由から命辛々アメリカに渡ってきた民族がアメリカ社会のなかで偏見や差別を跳ね除ける方法は、大きく二つある。一つ目は、他民族から差別を受けるのであれば、同じ民族同士で団結し助け合うことである。華僑といわれる中国系移民の団結は強く、世界の大都市にはたいていチャイナタウンがあるという事実はこの結束力の強さを物語る。同様に、大都市にはリトルイタリーと呼ばれるイタリア人街も往々にして存在する。また、マフィアという組織の成り立ちが同じ民族同士の互助組織だったことは有名である。マフィアの団結が固く、家族的な人間関係を形成し、裏切りは許されないというのは当然のことなのだ。

そして、ある社会で認められるための二つ目の方法は、その社会の権力を握ること、少なくとも権力の側につくことである。社会的に権力を持つ地位は政治家・実業家・弁護士・学者・医者などさまざまなものがあるが、そのなかで、教育が受けられなくても経済的に貧しくても入りこんでいける分野、つまり実力の世界の代表が軍隊と警察なのだ。アメリカの作品に警官が登場する場合、それがさえない平警官だったりするときは特に、彼らがアイルランド系やイタリア系として描かれることが多いのは、それが典型的な構図だからである。

コロンボは、その名前をもってアメリカにおける民族的社会的マイノリティのイメージを人に与え、彼のさえない性格と外見がそのイメージに追い討ちをかける。高卒である彼は、しかしながら権力組織の一つである警察に入り、警察官としての優れた捜査力や推理力でアメリカ社会の差別意識と対峙するのである。

IV. 007と刑事コロンボの物語パターン

Ⅲで確認したように対極的な肉付けをされてい

る主人公007とコロンボだが、彼らがそれぞれの物語で対決する相手（敵・犯人）は、どのような人々だろうか。これもシリーズを追っていくと、自ずとその敵役像が浮かび上がってくる。

007の初期の適役は、アメリカと旧ソ連の冷戦時代に誕生したこともあって、当然ながら東側の権力者や西側に害を及ぼそうとする者たちであった。例えば第1作『カジノ・ロワイヤル』で007は各国諜報部員とスパイ合戦を繰り返して、1958年の『ドクター・ノオ』の敵役ジュリアス・ノウ博士はドイツ人宣教師と中国人女性との混血で、中国の秘密結社を経て原子力の権威となり、アメリカのロケット計画を阻止しようとするマッド・サイエンティストであった。『ゴールドフィンガー』のオーリック・ゴールドフィンガーは金に対する執着を持ち、自分の持つ金の価格を上げるためアメリカの金の貯蔵所を襲おうとし、007に阻止される。007の物語では典型的な悪の象徴が登場人物として具現化され、正義の象徴である007と対決するのだ。

もちろんその構図には危険もある。東側諸国が「悪」であるという価値観のもとでは、アングロサクソン系の007に対し、その敵はロシア人や中国人、かつての東ドイツ人であったりする。それに加えて、彼らの手下たちには朝鮮人や日本人（謎の東洋人ということなのだろう）、そして黒人が多い。今では政治的正しさが問われること必至の007の物語には、007が生まれた時代の意識や価値観が投影され、「悪」の象徴としての登場人物は、当時の読者や観客が納得するイメージを持つ人種や民族、政治的・社会的背景を持った者に集約されている。

そして、007は、あくまでも優雅に軽やかにその悪の権化と戦い、勝利を収める。敵であっても女性にはあくまでも優しく、騎士道精神を貫きながら正義を守る＝西側世界と世界平和を守る者の代表として、彼はイギリスのみならずアメリカなどの西側諸国から頼られ、世界正義の代表者としての権限を与えられ、正義の刃を振るう。彼は言わば初めから正体を明らかにしている水戸黄門といった存在なのだ。

それに対して、コロンボが犯罪を暴く相手はどうだろうか。初期のコロンボ作品における彼の敵役、つまり犯人の職業・社会的立場を羅列すると

次のようになる。精神分析医（『殺人処方箋』）、弁護士（『死者の身代金』）、人気作家（『構想の死角』）、退役軍人（元将軍）（『ホリスター将軍のコレクション』）、美術評論家（『二枚のドガの絵』）、化学工場専務で社長の甥（『死の方程式』）、建築家（『パイルD-3の壁』）、指揮者（『黒のエチュード』）、フットボールチームのオーナー（『アリバイのダイヤル』）、俳優（『ロンドンの傘』）、映画監督（『狂ったシナリオ』）、画家（『殺意のキャンバス』）。コロンの物語において犯罪をなすのは、上流階級の人々・政治家・知的エリート・軍人や経済人、あるいは芸術家などアメリカ社会の上澄みともいべき人々である。そして、普段の生活では決して彼と接点や交流を持つことはないだろう人々でもある。

しかし、アメリカ白人社会のなかでは構造的に自分よりも上位者・強者である彼らを、コロンは彼の唯一の、しかし強力な武器である推理力で追いつめていく。何度も追い返され、ののしられ、馬鹿にされながら、最後には彼のねばり強さが勝利を収めるのだ。そこには、権力を使って逃げようとする相手に対し、その権威や圧力に屈服することなく立ち向かっていく勇気と正義感、あるいはコロンを自分より知的社会的に劣っていると見下している相手をやりこめる彼の知恵や機転があり、そこに観客は快感を得、権力者の不正や犯罪が見逃しにされない結末に対して拍手を送るのである。

社会的強者の犯罪をイタリア移民の末裔である、しがない警部補が暴き、社会的立場の強さから彼を甘く見ていた者が、物語の最後にはその力関係を覆される。そこには社会転覆、地位逆転の爽快さがある。

おわりに

以上述べてきたように、『007』シリーズは007というイギリス・ヨーロッパ的なエリートスパイとそれを軸にした物語構造、『刑事コロンボ』シリーズはアメリカ的なイタリア系移民刑事とそれを軸にした物語構造を持っている。007の物語も刑事コロンの物語も、それぞれイギリス・アメリカの社会背景をもとに生まれてきたものであり、また、

その特殊性を持つがためにそれぞれが愛され人気のあるシリーズになっているのだ。二つのシリーズは、ミステリのジャンルも主人公の人物造形も全く異なるが、それぞれ典型的な物語パターンを持っている。そして、そのパターンをよく見てみると、やはりそこにはそれぞれイギリス・アメリカの社会・文化を背景にした要因があり、そこに、シリーズが長く続く人気の秘密が隠されていると言えるのだ。

もう一つ面白い点は、ミステリのジャンルが時代によって移り変わってきたように、007とコロンの誕生から時間が経ち、時代が移り価値観が変わるなかで、彼らの対峙する相手も変化したことである。007の敵は国際平和を脅かすマスコミ王、政治経済を恐慌に陥れる産業スパイからやがて麻薬王やテロリストになった。敵役の特徴も変わってきてはいるが、世界的国際的な「悪」を象徴的に現す者、体現する者たちであるという本質だけは変わらない。逆にいえば、007の敵はその時代その時代の「悪」であり「不正」であるのだ。

コロンの敵もその時代その時代の権威者である。新シリーズの『殺意の斬れ味』（1997年）における犯人は、警察の鑑識係であった。彼は鑑識のエキスパートとして証拠を隠滅し、陣頭指揮を執る振りをして捜査を混乱させる。犯人像の変化に新たな社会的権威や人気職業の出現を見ることができるとは興味深い。コロンの物語における犯人は、私たちが社会的権威を感じる存在や価値観の鏡なのだ。

もちろん、このような文化的背景と社会構造を知らなくても、『コロンボ』シリーズは刑事物語として、『007』シリーズはスパイアクションとして楽しめる作品だろう。しかしながら、それぞれの物語に通底している構造を見ると、そこに社会の、そして大衆の意識や価値観の変化が見えてくる。大衆作品・娯楽作品といわれるミステリも、このように文化的・社会的に分析することができるのだ。

注

- 1) 日本語タイトルの『刑事コロンボ』は、最初の訳をそのまま使って「刑事」になっているが、ドラマの中では「警部」と呼ばれている。

参考文献

- H・ヘイクラフト『推理小説の美学』鈴木幸夫訳 研究社
出版 1974年
- H・ヘイクラフト『娯楽としての殺人』林俊一郎訳 国書
刊行会 1992年
- 山路龍天・松島征・原田邦夫『物語の迷宮-ミステリーの詩

- 学』有斐閣 1986年
- マーク・ダウィッドジアク『刑事コロンボ レインコート
の中のすべて』岩井田雅行・あずまゆか訳 角川書店
1999年
- (うじいえ・りえ 聖学院大学人文学部欧米文化学
科教授)